

おおてまえこうこう  
大阪・府立 **大手前高校**

コミュニケーション力をベースに  
国際社会に貢献できる人材を育成

取材・文／藤崎雅子



≫実践ノウハウ

- 学校教育全体を通じてコミュニケーション力を育成
- 海外の高校生と交流する機会を積極的に設定
- 国際的に活躍できる科学技術系人材の育成に注力

校舎から大阪城天守閣がのぞめる大阪府立大手前高校は、普通科と理数科を設置する進学校だ。多様な分野で国際的に貢献できるリーダーの育成を目指し、近年は大阪府教育委員会のエル・ハイスクール※1や文部科学省のスーパーサイエンスハイスクール(SHS)の指定校として改革を進めてきた。

そのなかで独自の教育システム「大手前高校生の能力を高めるための方式」(図1)を構築。豊かなコミュニケーション力をつけることと適切なキャリアガイダンスによって、自学重視、行事・体験重視の教育をより充実したものとし、生徒一人ひとりの能力を高め、進路実現させることを目指している。この10年間で進路実績が大きく伸びたのも、そうした取り組みの成果のひとつと考えられている。

なぜ学ぶかを自覚させる  
体験的な活動が充実

「大手前方式」の大きな特徴は、コミュニケーション力の育成を教育活動の土台に位置づけている点だ。校長の原田哲次先生はその重要性についてこう話す。

「人の話や文章を正確に理解し、それについて論理的に考えて意見や感想をもったり、相手がかかるように表現する『コミュニケーション力』。それはすべての教科の学力を支える土台であり、大

学合格だけでなく社会での活躍のために重要な力だと考えています」

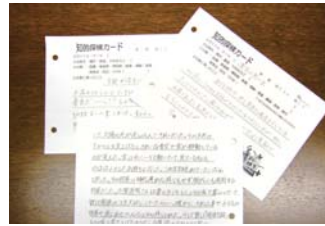
コミュニケーション力の育成は、授業、HR、行事などあらゆる時間を通して行われる。例えば、授業にはスピーチやプレゼンテーション、ディベートを積極的に導入。小論文指導では文章表現のスキルを教えるだけでなく、1年次に推薦図書一覧『大手前高校の百冊』を配布して思考の中身の充実も図っている。また、日々の気づきや印象に残ったことを書きためる「知的探検カード」を作成(42P上写真参照)。日常的に記入して各自フアイリングするが、教室掲示や通信掲載により生徒間でも共有している。さらに英語でのコミュニケーションも重視しており、英国の姉妹校との相互訪問をはじめとする活発な国際交流は同校の大きな特色となっている。

また、進路指導においては「なぜ学ぶのかの自覚が非常に大事(原田校長先生)と、教師が教え込むのではなく体験を通して自ら考えさせる活動が充実。LHRや総合的な学習の時間を活用し、職業および学部・学科についてのグループ研究や、卒業生の講演会などを行っている。なかでも生徒に大きな影響を与えているのが、1・2学年を対象として毎年12月に2日間行う「集中セミナー」だ。大学や研究機関・事業所等の協力を得て、学問や職業に関する約80講座を校内外で開講(42P上表参照)。各自が希望する講座を各日1つ選んで参加し、視野の拡大や進路選択に役立てている。

※1=大阪府教育委員会が「次代をリードする人材育成研究開発重点校」として府立高等学校を指定する事業。2003年度から5年間で17校を指定

平成21年度 集中セミナー講座一覧表(2日間)

講座番号	講座名	講師
1	自己理解から生き方探求	川口雅子先生(大阪府立東淀川高等学校)
2	自己理解から生き方探求	川口雅子先生(大阪府立東淀川高等学校)
3	自己理解から生き方探求	川口雅子先生(大阪府立東淀川高等学校)
4	自己理解から生き方探求	川口雅子先生(大阪府立東淀川高等学校)
5	自己理解から生き方探求	川口雅子先生(大阪府立東淀川高等学校)
6	自己理解から生き方探求	川口雅子先生(大阪府立東淀川高等学校)
7	自己理解から生き方探求	川口雅子先生(大阪府立東淀川高等学校)
8	自己理解から生き方探求	川口雅子先生(大阪府立東淀川高等学校)
9	自己理解から生き方探求	川口雅子先生(大阪府立東淀川高等学校)
10	自己理解から生き方探求	川口雅子先生(大阪府立東淀川高等学校)
11	自己理解から生き方探求	川口雅子先生(大阪府立東淀川高等学校)
12	自己理解から生き方探求	川口雅子先生(大阪府立東淀川高等学校)
13	自己理解から生き方探求	川口雅子先生(大阪府立東淀川高等学校)
14	自己理解から生き方探求	川口雅子先生(大阪府立東淀川高等学校)
15	自己理解から生き方探求	川口雅子先生(大阪府立東淀川高等学校)
16	自己理解から生き方探求	川口雅子先生(大阪府立東淀川高等学校)
17	自己理解から生き方探求	川口雅子先生(大阪府立東淀川高等学校)
18	自己理解から生き方探求	川口雅子先生(大阪府立東淀川高等学校)
19	自己理解から生き方探求	川口雅子先生(大阪府立東淀川高等学校)
20	自己理解から生き方探求	川口雅子先生(大阪府立東淀川高等学校)



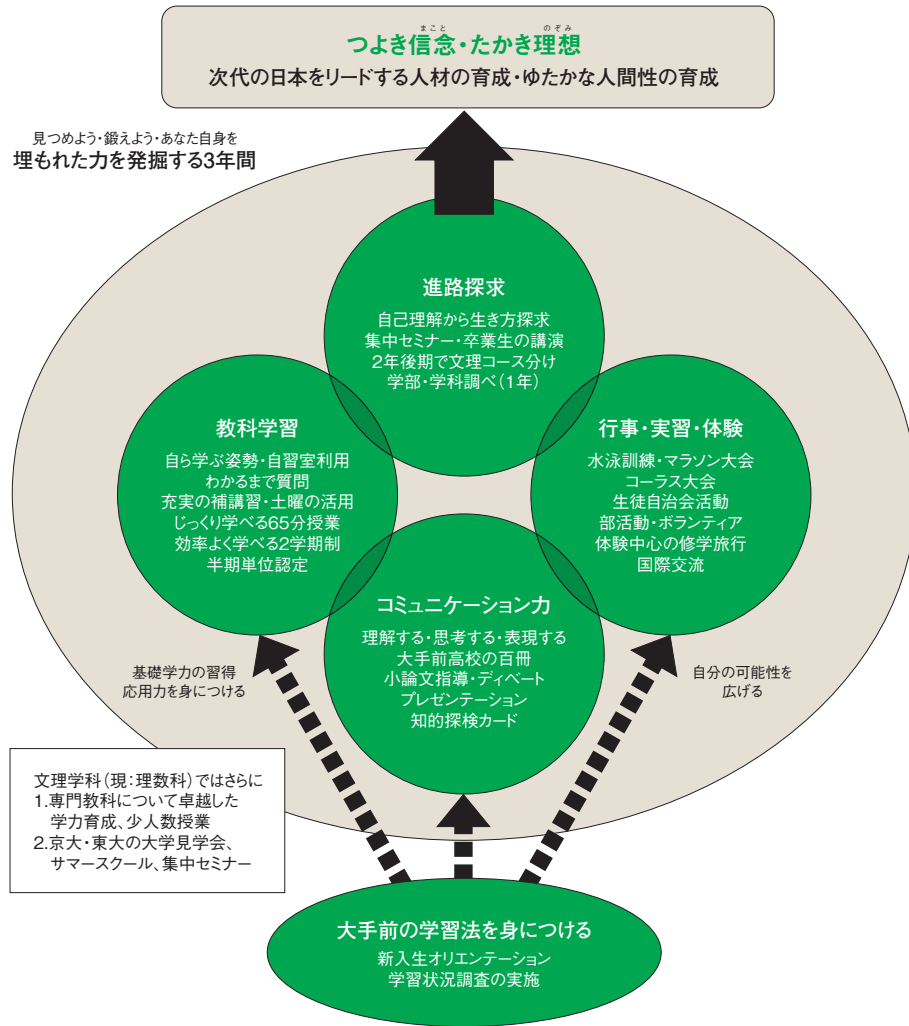
集中セミナー実施後は事後報告会をプレゼンテーション形式で実施し、体験を共有している

日常の気づきなどを記入するB6判の「知的探検カード」。応用編として「新聞探検カード」もある

>>School Data

普通科・理数科 / 1886年創立  
 生徒数 / 997人(男子565人・女子432人)  
 進路状況(2009年度実績) / 大学 58.5%・  
 専門学校 0.3%・その他(進学準備) 41.2%  
 大阪市中央区大手前2-1-11  
 TEL 06-6941-0051  
 URL http://www.osaka-c.ed.jp/otemae/zen/

図1 大手前高校生の能力を高めるための方式



文理学科(現:理数科)ではさらに  
 1.専門教科について卓越した  
 学力育成、少人数授業  
 2.京大・東大の大学見学会、  
 サマースクール、集中セミナー

「週5日制や新カリキュラム、学区改編などの環境変化にさらされるなかで、教員が『このまま...』という印象があったという。それが大きく変化した背景について、コミュニケーション力育成活動を推進してきた石若達弥先生はこう話す。

「週5日制や新カリキュラム、学区改編などの環境変化にさらされるなかで、教員が『このまま...』という印象があったという。それが大きく変化した背景について、コミュニケーション力育成活動を推進してきた石若達弥先生はこう話す。

「週5日制や新カリキュラム、学区改編などの環境変化にさらされるなかで、教員が『このまま...』という印象があったという。それが大きく変化した背景について、コミュニケーション力育成活動を推進してきた石若達弥先生はこう話す。

「週5日制や新カリキュラム、学区改編などの環境変化にさらされるなかで、教員が『このまま...』という印象があったという。それが大きく変化した背景について、コミュニケーション力育成活動を推進してきた石若達弥先生はこう話す。

「週5日制や新カリキュラム、学区改編などの環境変化にさらされるなかで、教員が『このまま...』という印象があったという。それが大きく変化した背景について、コミュニケーション力育成活動を推進してきた石若達弥先生はこう話す。

「週5日制や新カリキュラム、学区改編などの環境変化にさらされるなかで、教員が『このまま...』という印象があったという。それが大きく変化した背景について、コミュニケーション力育成活動を推進してきた石若達弥先生はこう話す。

「週5日制や新カリキュラム、学区改編などの環境変化にさらされるなかで、教員が『このまま...』という印象があったという。それが大きく変化した背景について、コミュニケーション力育成活動を推進してきた石若達弥先生はこう話す。

「週5日制や新カリキュラム、学区改編などの環境変化にさらされるなかで、教員が『このまま...』という印象があったという。それが大きく変化した背景について、コミュニケーション力育成活動を推進してきた石若達弥先生はこう話す。

Process  
 立ち上げのプロセス  
 埋もれた特色を掘り起こし  
 普通の進学校から脱皮  
 現在はコミュニケーション教育や国際交流に特色があり、府立高校トップクラスの進路実績で活

気づいている同校だが、十数年前は違う状況だったようだ。以前を知る教員によると「大きな特徴のない学校」「校内だけのおさまって動きの少ない学校」という印象があったという。それが大きく変化した背景について、コミュニケーション力育成活動を推進してきた石若達弥先生はこう話す。

「週5日制や新カリキュラム、学区改編などの環境変化にさらされるなかで、教員が『このまま...』という印象があったという。それが大きく変化した背景について、コミュニケーション力育成活動を推進してきた石若達弥先生はこう話す。

では本校が求められている社会的責任を果たせない」という危機感をもったことが原動力になったと思います」

週5日制実施を前に二学期制や半期単位認定の導入など体制の見直しが進められたが、02年度にエル・ハイスクールの指定を受けたことで改革は加速。各教員の個人的な実践や経験・人脈をもとにした特色が打ち出された。「コミュニケーション力の育成」「国際感覚の涵養」などのキーワードは、このなかであがってきたものだ。

同校では従来から国語、英語、家庭科などでスピーチやディベートを取り入れた授業が行われていたことが、コミュニケーション力育成策のもととなった。「生徒同士で考えを発表し合い考えを深めていくことが生徒の力を大きく伸ばすと、自身の経験から感じていました」という石若先生らは、そうした授業を学校全体の取り組みとして体系化した。さらに授業だけでなく日常的に体験から感じたことや考えを発信できるよう、「知的探検カード」を作成。小論文指導は様々な教科の教員が連携してあたる体制が作られた。

また国際感覚を養うためには、REXプログラム※2で英国派遣の経験がある川口雅子先生が中心となり、英国ペンブライズ校との相互訪問制度を立ち上げた。「海外で自分が受けたたくさんの刺激を生徒たちにも与えたい、それも家庭への費用負担をおさえて幅広い生徒が参加できるようにしたい(川口先生)との思いで、現地校との交渉からプログラム作成まで教育委員会や旅行会

※2=全国の公立中学校・高等学校の若手教員を対象とした、文部科学省の外国教育施設日本語指導教員派遣事業。海外の日本語教育を行う中等教育施設への派遣を含む2年間のプログラム



国際交流委員長  
川口雅子先生



3学年主任  
石若達弥先生



首席・SSH研究主任  
宮城憲博先生



校長  
原田哲次先生

同校が力を入れる国際交流について、その端緒となった英国ウェールズのペングライス校との交流から見ていきたい。ペングライス校とは訪問と受

## 海外の高校生が頻繁に訪問 生徒の視野を自然に開く

Close up ①

国際交流

「コアSSH」にも採択され、理数系教育における中核的な学校として機能強化していく計画だ。

進めたことで、協力体制が少しずつできた(原田校長先生)ことが、着実な実践を支えたようだ。エル・ハイスクールのプロジェクトが終了した08年度、新たにSSHの指定校となり理数科を中心に取り組んでいる。今年度は数学に特化して取り組み、他のSSH指定校を支援する役割も担う

「コアSSH」にも採択され、理数系教育における中核的な学校として機能強化していく計画だ。

社に頼らず同校教員の手づくりによる。費用面は同窓会「金蘭会」に援助をおおぎ、生徒の費用負担を2割程度におさえた。英国交流開始以降、外務省や文部科学省が主催するプログラム

図2 国際交流の内容 (09年度)

事業	日程	内容
英国交流 ※8年目	7月 (14日間)	姉妹校である英国ウェールズのペングライス校へ生徒8人、引率教員2人が訪問。現地の生徒・教員宅でホームステイ。ペングライス校の授業に参加しながら、剣道形・よさこいソーラン節、折り紙、書道等の日本文化を紹介。小学校訪問やウェールズの観光も楽しむ。
インドネシア 高校生との交流	7月 (3日間)	外務省の「JENESYS21世紀東アジア青少年大交流計画」(JICE担当)の短期招請事業。生徒21人と引率教員2人が来校し、同校の授業や部活に参加しながら、生徒宅にホームステイをするプログラム。(来日後、インフルエンザの影響で直前に中止)
日欧高校生 交流プログラム ※5年目	8月～ (4か月間)	外務省のJESEPプログラム (IFA担当)による受け入れ。09年はドイツとリトアニアの男子生徒各1人ずつが、ホームステイしながら1年生のクラスで学ぶ。1年生の4家庭が1～2か月単位でホストファミリーとなり、のべ4クラスで授業を受ける。
中国高校生 長期招請事業 ※4年目	9月～ (約1年間)	JENESYS (日中交流センター担当)により中国女子生徒1人が来校。9月に2年生のクラスに入り3年生の夏まで共に学ぶ。東北地方の農家で民泊を中心とした修学旅行にも参加。生徒宅でのホームステイは、1～2か月単位で移動。
日中交流事業 高校生訪日団短期	11月 (1日)	JENESYS (JICE担当)により中国高校生20人、引率教員3人が来校。英語・音楽の授業に参加した後、同校生徒の案内により剣道、合気道、柔道等の部活動を見学し、茶道部による茶の湯を体験。
SSH 国際学会議	3月 (3日間)	中国の北京市、上海市から1校ずつ、韓国、タイより各1校ずつの計4校から、各々生徒2人、引率教員1人が来日し、会議にて環境問題についてプレゼンテーション。最終日は、同校生徒とともに研究施設訪問、関西観光を実施。期間中は生徒宅にホームステイ。

※=2010年度における実施年数

入れを隔年で交互に実施しており、それぞれ約2週間ホームステイして現地校の授業に参加したり、各国の文化を紹介するなどの交流をしている。同校が行う国際交流の中で唯一海外へ出る機会とあって、ペングライス校訪問は生徒から人気

### REPORT

## ペングライス校(英国ウェールズ姉妹校)に派遣された生徒たちの日記より

### ■7月6日(ウェールズ着)

「ずっと眠っていたので、ホストファミリーに会う心の準備ができておらず、「着いたよ」と起こされたときはけっこう焦った。定番のNice to meet you.しか言えず、もっとバスの中で考えておけばよかったと後悔した」

### ■7月8日(現地校の生徒に日本の紹介プレゼンテーション)

「今日初めてパフォーマンスをした。日本とイギリスの違いを発見した気がした。パフォーマンスを見るペングライスの生徒は真剣なまなざしで、にらみつけているようにも見えて逆に怖かった。でも、それだけ真剣に見てくれるかと思うと、うれしかった」

### ■7月13日(ウェールズ北部見学)

「リディは本当に日本のアニメ、マンガ、曲を知っていて、私より詳しいくらいだった。ハーレック城へ向かうバスの中は音楽の話でけっこう盛り上がった。今日はなぜかものすごく日本語を話さなかった。リディやほかのホストの子たちとも話す機会が多くなった。本当にやさしくて、良い人だ」

### ■7月15日(日本のイメージについての調査をして)

「日本は『ハイテク』『大都会』というイメージと、「伝統的」というイメージの対照的な2つが多く、おもしろいレポートが書けるかもしれないと思った」

### ■7月17日(最終日)

「車に乗って見る景色もこれが最後だと思つて涙が出そうになった。10時半からコーヒーモーニング。別れのあいさつでまた泣きそうになった。プレゼントでペングライス校のトレーナーやネクタイをもらい感激。先生方に「あなたもペングライス校の生徒ね」と言われ、ものすごくうれしかった。トレーナーを着てみんなたくさん写真を撮った。日本に帰りたくない、ずっとここにいたいと思う」

### ■7月19日(帰国)

「帰った後、PCを開くと早速リディからメールが来ていて、うれしかった。これからも向こうの人たちと連絡を取り合っていきたいと思う。もう一度、絶対にウェールズに帰りたい」







4カ国5校による高校生国際科学会議。共同宣言の後は、海外の参加校も交えてよさこいソーランを踊って親交を深めた。訪問中は生徒宅にホームステイし、会議以外の場でも交流

が高い。定員8人のところ、昨年度は144人の応募があった。参加者の選考は小論文2本の提出と2回の面接によって行われ、英語が堪能であることよりも意欲や志の大きさが測られる。

「希望しても行けない生徒が大多数ですが、小論文や面接に挑戦したことで『いい経験になった』と自分のなかに何かは残るようです。また、参加者は英国での体験や発見をレポートにまとめて報告会で発表して、経験の共有を図っています」(川口先生)

一方、海外から同校へは、ペンブライズ校の生徒のほかにも、ヨーロッパやアジアの各国から年間およそ60人の高校生が訪れる(図2)。期間は1日の短期訪問から1年間の長期留学まで様々だが、宿泊を伴う場合は生徒宅にホームステイすることを基本としており、年間で延べ50家庭ほどが協力している。留学生は同校生に交じって授業や部活動に参加。生徒有志によるサポーター制度があり、彼らが名所観光ツアー、和菓子作りや和太鼓体験などを企画し、共に活動して親交を深めている。

「校内に外国の高校生がいるのが、今ではごく普通の風景。自然と海外の国々に目が向くようになります。また、英語が多少下手でもコミュニケーションすることに抵抗がなくなり、『母国語ではないのに英語がうまい』『将来のことをしっかり考えている』など刺激を受けていると感じます」(川口先生)

Close up ②

理数コミュニケーションカ

理・国・英の教員が連携して1つの授業を作る

同校が理数教育において目標にしているのは、科学研究によって世界に貢献できる人材の養成だ。SSH指定を機として、これまで積み重ねてきたコミュニケーション教育や国際交流のノウハウや成果を基礎とした、発展的なプログラム開発に取り組んでいる。そこで重視されているのは、科学への探究心と、理数コミュニケーション力の育成だ。担当の宮城憲博先生はこう話す。

「従来から育成に努めてきたコミュニケーション力をふくらませ、より論理的な思考をもつて情報を活用し表現・発信する総合力を、理数コミュニケーション力と呼び、3年間で段階的に育成しています」

カリキュラム面では、理数科に3つの学校設定科目を設定(図3)。1学年後期の「まこと」で小論文や英語のプレゼンテーションの方法を学び、2学年前期の「のぞみ」で統計処理について学習。そうして学んだスキルを使い、2学年後期からの「サイエンス探究」で4〜5人のグループごとに設定した課題の研究に1年間取り組む。

一連の授業で注目したいのは、「まこと」における教員の連携だ。最初のテーマ設定の指導は理科の教員、論文作成の部分は国語の教員、それ

を英語でプレゼンテーションできるように英語と情報の教員が指導するという具合に、教科を横断して1つの授業を作り上げている。そうして力をつけてのぞんだ3学年の「サイエンス探究」では、今年度の全国SSH生徒研究発表会で第2位に

図3 SSHの代表的な取り組み

		授業		行事
1年	前期	「プレサイエンス探究」 「数リナビック」	科学的な事項への興味・関心の醸成	○東京研修(大学・研究所見学、専門家の講演、先輩懇話会)
	後期	学校設定科目 「まこと」	小論文作成、英語によるプレゼン	○大阪府生徒研究発表会
2年	前期	学校設定科目 「のぞみ」	統計処理能力の育成、数学的内容のプレゼン	○サマースクール(京大見学、専門家の講演、数学に関するプレゼン) ○SSH生徒研究発表大会
	後期	学校設定科目 「サイエンス探究」	各自が希望するテーマについて課題研究	○高校生国際科学会議(環境問題について海外の高校生とともに共同宣言を行う)
3年	前期		科学的な事項への興味・関心の醸成	○課題研究発表会

図4 高校生国際科学会議 各校の研究テーマ

- ラタナコシン島の水質調査  
(タイ・チュラロンコン大学附属高校)
- フーチュン川の水質調査  
(中国・上海外国語大学附属外国語学校)
- 北京を流れる川の水質調査  
(中国・北京101中学)
- バイオフィルターを使った揮発性有機物の除去  
(韓国・漢城科学高校)
- 土壌と土壌水に含まれる窒素化合物間の関係  
(大手前高校)

相当する独立行政法人科学技術振興機構理事  
長賞を受賞する成果があがったという。

## アジア4カ国の高校生が集い 環境問題について共同宣言

授業以外にも、2泊3日の「東京研修」や「サ  
マースクール」など、大学や研究所の協力を得て  
科学の先端に触れる機会が随時提供される。な  
かでも今年3月に全校をあげて開催にこぎつけた  
「高校生国際科学会議」は、同校が取り組んでき  
た理数教育の集大成である。これは中国、韓国、  
タイの計4校の高校生と連携して環境問題を  
テーマに研究し、最後は日本にて研究成果を発表  
し合う会議を開くというものだ(図4)。

同校は会議の2年前から準備をスタート。領  
事館に依頼して学校を紹介してもらった後は、学  
校同士で直接交渉となったが、「各国の事情で連  
絡がスムーズにいかずに焦ることもあった」(宮城  
先生)という。生徒は希望者で発表チームを組み、  
「サイエンス探究」のなかで研究を進めながら、参  
加校と英語のメールで情報交換を重ねた。発表  
準備では、「どうやったらわかりやすく研究結果  
を伝えられるか」「そのまま英語にしても伝えよ  
うとすることが少し変わってしまうのをどう翻  
訳するか」と悩みながら取り組んだという。

国際会議の本番は、同校生徒の司会により、フ  
ロアからの質問もすべて通訳なしで英語で進行。  
各校の発表後、「美しい地球を未来の世代に受け

継ぐ架け橋として共に行動していく」ことを誓っ  
た共同宣言がまとめられた。

「将来、世界レベルで科学分野をリードしてい  
くためには、学校内で収まるのではなくエネルギー  
ギンシユなアジア各国の高校生と切磋琢磨してい  
くことが大切です。その1つの方法として手ごた  
えを感じることができました。運営方法や費用  
の問題はありますが、今後このような会議を  
数年に一度は実施できるよう、検討していきたい  
と思います」(宮城先生)

●  
変化の少なかつた10年前と比べると教員の負  
担は増しているというが、聞かれるのは「せっかく  
変えるならいいものにした」「生徒のためになる  
なら」といった言葉だ。改革の始まりは環境変化

への対応だったが、よい循環を生むことができたの  
は教員が連携し「つひとつ熱心に取り組んできた  
からだ」と感じられる。そうした教員の熱意が伝  
わったのか、卒業生や同窓会は「OB講演会に快  
く参加してください」と、新たな活動を資金面  
で援助してくださったりと、以前にも増して協力  
的」(石若先生)だという。

来年度、同校はさらに新しい局面を迎える。大  
阪府の進学指導特色校の10校に指定され、文  
系・理系の両方に対応した進学指導に力を入れる  
「文理学科」を新設するのだ。理数科で行ってき  
た教育方法を文系にも応用し、英語によるプレゼ  
ンテーションや社会科学分野の課題研究などに  
取り組んでいく。「大手前方式」のさらなる進化  
が期待されている。

### INTERVIEW

## 豊富なチャンスを生かして経験を積みたい



理数科3年  
河岸良承さん(右)  
幸寺健悟さん(左)

●メコン5カ国訪問団が来校した時、友達がホームステイの受け入れをして  
いたので、ラオスの高校生とお好み焼きを食べに行ったりして、たくさん話す  
ことができました。お互い英語は流暢ではありませんでしたが、必死に伝え合  
おうとしてうまくコミュニケーションできたと思います。彼は環境の勉強をして  
いて、日本の大学で学ぶことも考えているとのこと。自分のやりたいことを決  
めて、そこから進路をどうするかを決める傾向が、日本人より強いように感じま  
した。僕自身は、将来は海外で働きたいと考えています。ウェールズの姉妹校  
へは最終選考で落ちて行けなかったのですが、大学在学中卒業後にイギ  
リスの大学に留学してみたいですね。(河岸さん)

●高校生国際科学会議では、英語で司会を務めました。台本に沿って進  
めるのですが、質疑応答では臨機応変に対処しなくてはなりません。あまり  
手があがらなくてどう発言を促したらよいか苦労しましたが、いい経験になり  
ました。僕は大学進学後、自然の原理や環境の研究をして、新しいものを  
発見する喜びをもっと味わいたいと考えています。そのなかで英語が使えたら、  
活躍の場がもっと広がるでしょう。だから今回のような英語を使う国際  
会議にも何らかの形で参加してみたく、先生に相談して司会を担当させて  
もらうことになりました。大手前高校は国際交流や校外活動などがとても  
充実している学校です。これから何でもチャレンジして経験を積みたいと  
思います。(幸寺さん)